

「早期肝癌と類似病変の病理」

久留米大学教授・病理学第1講座 神代 正道 著

癌研究会名誉研究所長

菅 野 晴 夫

今日本では肝癌が、そして前癌状態とも言ふべき種々の過形成病変も、急速に増加している。エコーなどの診断法によって肝病変がよくわかるようになり、殊にエコー誘導下生検の普及によって、肝病変の診断が日常業務となってきた。また、肝切除術も広く施行され病理に回ってくる。したがって、早期肝癌とその類似病変についての正確な知識が必須となっている。本書はその強い要望に応えるもので、待望久しかった出版である。

著者の神代教授は肝病理の日本の第一人者で、早くから小型肝癌、早期肝癌の研究を精力的に行い、小型肝癌は極めて分化のよい肝細胞癌であることを明らかにされたことで有名である。本書は、久留米大学医学部の内科、外科、病理の緊密な協同体制による肝研究の病理学的成果を自験例を用いて書き下ろされたもので、迫力がみなぎっている。豊富な知識、統計がきっちり示されている簡潔な記述、鮮明で美しいカラー写真が一体となった見事なモノグラフである。

早期肝癌をめぐる臨床病理学的現状では、いかにして小型癌、早期癌の発見が可能になったかが述べてあり、興味深い。早期肝癌の病理形態は本書の中核をなすもので、分類と

組織像を正確に教えてくれる。続いて、生検診断、血管構築、病理形態と超音波像という極めて重要な事項が述べられている。早期肝癌の生物学的諸問題では、早期癌は大部分が高分化癌であるが、増殖し大きくなるにつれて低分化になる(脱分化すること、それは高分化の nodule の中に中分化の nodule が、またその中に低分化の nodule が生じるいわゆる nodule in nodule 式に脱分化(悪性化)が進むことが、美しい写真とコンピューターグラフィックで示されている。また、肝癌は多中心性に発生すること、背景病変である肝炎ウイルスによる慢性肝病変がB型、C型肝炎によって違うこと、慢性肝炎に合併した肝細胞癌の特徴が、詳細に示されている。エタノール注入療法による形態変化、肝癌の播種の危険性も示唆に富む。

肝の過形成病変の認識と診断は極めて重要であり、ときとして極めて難しい。本書では、大再生結節、腺腫様過形成、異型腺腫様過形成、癌を内包する腺腫様過形成などについて肝硬変症にみられるものと非肝硬変にみられるものとに分け、これまでの解釈、問題点、更に、adenoma-carcinoma 連鎖、de novo 癌を含めて非常によく整理してある。いわゆる境界領域病変の考え方と診断は永

遠の課題とも言えるものであるが、著者は、この難問の解決に臨床所見を重視したプラクティカルな方法を取り、問題は問題として残しておくという柔軟な姿勢を勧めており、賛成である。更に、比較的珍しい非腫瘍性結節性病変、肝細胞腫、胆管細胞腺腫、clear cell type の肝細胞癌と類似する転移性腫瘍などの鑑別診断としても重要な病変が述べられている。

著者は、日本の症例のみならず、諸外国の肝癌、肝硬変の経験も豊富である。本書は、世界の肝癌に通じていることに裏打ちされた強みがあり、国際的にも高く評価される(本書の英訳が望まれる)。

本書は、肝病変の診断、治療に従事している病理医、医師、研究者には必読の書である。また、肝に関心と興味を持っているすべての人々にも肝癌、肝病変のユニークさ、おもしろさを教えてくれるものと信ずる。1人でも多くの方に読んでいただいて、広く役に立てていただきたいと願っている。

● B5 頁 238 図 9 写真 16
原色図 240 1996 定価 13,390
円(税込) 〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)